五雲会

二〇一九年九月十四日（土）
開演 十二時（正午）
開場 十一時
於 宝生能楽堂

12:00

通小町

ツレ 金森 良充
シテ 水上 優
ワキ 森 常好
大鼓 柿原 光博
小鼓 田邊 恭資
笛 小野寺竜一
後見 宝生 和英
藪 克徳
地謡 木谷 哲也
今井 基
金野 泰大
佐野 玄宜
高橋 亘
佐野 由於
金森 秀祥
渡邊 茂人

13:00

狐塚

小唄入
山本 則重
山本 則俊
山本 則秀

〈休憩十五分〉

13:40

玉葛

シテ 小林 晋也
ワキ 村瀬 提
間 山本凜太郎
大鼓 原岡 一之
小鼓 飯冨 孔明
笛 寺井 義明
後見 大友 順
澤田 宏司
地謡 上野 能寛
辰巳 和磨
川瀬 隆士
當山 淳司
佐野 登
朝倉 俊樹
東川 光夫
和久荘太郎

15:05

紅葉狩

〃 金森 隆晋
〃 佐野 弘宜
ツレ 内藤 飛能
シテ 東川 尚史
ワキ 則久 英志
間 山本 則秀
若松 隆
大鼓 大倉栄太郎
小鼓 清水 和音
太鼓 徳田 宗久
笛 藤田 貴寛
後見 小倉伸二郎
亀井 雄二
朝倉 大輔
木谷 哲也
地謡 藤井 秋雅
金井 賢郎
田崎 甫
辰巳大二郎
小倉健太郎
山内 崇生
野月 聡
高橋 憲正

〈休憩十五分〉

終演予定 十六時二十分頃

演目の解説

能「通小町」（かよいこまち）
八瀬の里に住む僧のもとに、若い女が木の実を持って度々通って来ます。僧が木の名の実の名前を尋ねると、色々の椎の実の名を挙げ、何故かいくつかの名を問われるとど め、更に自身の名を仄めかして消え失せます。野小町の原野へ行き弔っていると、小町の霊が市原野へ行き、小町に執心の深草少将の霊が現れますが、小町のもとに（四位少将）の霊も現れ、小町に死んでし百夜通い、九十九夜目に空しく死んでしまった有様を見せ、共に成仏を願います。

狂言「狐塚（小唄入）」（きつねづか）
主人は太郎冠者と次郎冠者を呼び出し、鳥が田を荒らすので、狐塚にある田に行って番をするように命じ、夜になると狐塚には悪い狐が出て人を化かすからと、鳥を追うための鳴子を持たせて出かけさせます。狐塚に着いた二人は、さっそく鳴子を振って鳥を追うが、日が暮れたので休むことにしました。そこに主人が、酒をもって見舞いにやってきたので、二人はてっきり狐のしわざと思い込んで、狐の正体を明かそうと松葉を焼いて主人をいぶし、縛り付けます＊。大蔵流には「小唄入」の演出があり…。鳥を追う場面での小唄が抒情性を増しています。

能「玉葛」（たまかずら）
長谷寺に参詣する僧が初瀬にさしかかると、川舟を操る女性が通りかかります。女は、僧を二本杉に案内し、源氏物語の中で、玉葛が母の夕顔の死後、九州に下って乳母に育てられていたが、都に上ってこの二本杉で母の侍女であった右近に会い、光源氏に引き取られることとなった事を語ります。そして自分こそ玉葛の霊と名乗り、弔いを頼んで消え失せます。後半、弔いの内に玉葛は狂乱の体で現れ、我が身に降りかかった男たちの妄執の苦しさを語ります。

能「紅葉狩」（もみじがり）
平維茂は信州戸隠山に鹿狩りに出掛け、山中で酒宴を催す美女達に出会います。不審に思い、遠慮する維茂を女達は引き留め、酒を勧め舞を舞います。維茂が寝入ってしまうのを見計らった女が、舞が急転すると、女達は消え失せますが、尚も維茂は寝入っています。ここに八幡宮の遣いが現れ、今の女は戸隠山の鬼女であると告げ、この太刀で退治したまえと言って太刀を授け、目を覚ました維茂は現れた鬼女と戦い、切り伏せて去ってきます。

次回予告

二〇一九年十月十九日（土）正午 始

敦盛 辰巳 和磨
井筒 大友 順
葵上 澤田 宏司

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会